

## 古儀式派と諸宗教セクトとの関係 (1)

安 村 仁 志

### プロレゴメナ

#### 1) 問題の所在

раскольники は、わが国では通常「分離派」と訳されている<sup>(1)</sup>。しかし、「分離派」という用語について明確に規定されているとはいえず、実際上はかなり漠然と、また曖昧に使われている。「古儀式派」に限定して使われる場合と、その他の宗教セクトをも含めて正教会から分離しているもの全体を指して使われる場合がある。そして後者においては古儀式派とその他のセクトとの関係、相違点が明確にされていないのが現状である。

「分離」ということに関しては、何と何の分離か、分離の原因・契機は何か、それらはどういう性質のものかが問われなければならない、それによって分離の類別をする必要がある。宗教上の分離についていえば、教義上の問題、人的或いは組織運営上の問題の二点が契機になることが多いが、い

---

(1) 各種露和辞典では「分離派(教徒)」の訳語が定着しており、расколоть(ся)が元の語だとされている。しかし、この語は薪や胡桃などを「打ち割る」、「断ち割る」の意で使われ、派生して「団体や組織を割る、分裂させる」の意ももつ。それらの現象が раскол であり、(教会)が二つに裂けて分かれたことを意味する。とすれば、ラスコールとは教会分裂のこととなり、「シスマ」の概念に近づく。手元の露英辞典でもラスコールは schism となっている。ロシアの正教会も「ニーコンの改革」をめぐる確かに分裂したのである。分裂には、二派の勢力関係により、真二つに分かれる場合もあろうし、一部の勢力が分離していく・分離させられていく場合もある。ここで問題になっているロシア教会の分裂は、後者の場合であろう。つまり、多数派と少数派の分裂状態が生じたのであるが、その後もその少数派は大きな勢力をもち得なかった。したがって、「分離した状態にある者たち」、或は「分派」が結果として生まれたのである。そのうえで、「自ら別れ出て行った」のか、「追放、排除された」のかの問題が問われなければならない。

ずれであるか、また、重なっている場合はその重なり具合はどうであるかなどはその分離の性質を捉えるうえで厳密に検討されなければならない。さらに、教義の問題については、「正統——異端」という問題が係わってくるが、それがどういう性質・内容をもつものであるかをも十分に検討しなければならない。

教会改革をめぐって対立が生じ、正統の地位を得たニーコン派と論争に敗れたグループの間では、当然のこと後者が異端者として分離・排除され、分離派となった<sup>(2)</sup>。一方、分離派の方もニーコンの改革を認めず、ニーコン派公教会を異端視した。この場合、当時のロシアにおける正教の教義・信仰が問題となったが、詳細にその内容を分析・検討する必要がある。何故ならば、対立点が一見外面的、非教義的なもののように映るとともに、分離派も正教の根本的な部分を否定しているわけではないからである。しかし、その立場の違いは正教の信仰からすると重大な問題を含んでいたことも考慮しなければならない。一方、フルィスティ（鞭身教徒）等の宗教セクトは概して正教の教義に対立する主張をもっている。その意味では、ニーコンの改革に反対したいいわゆる「分離派」とそれらのセクトには基本的な違いがあるように見える。しかし、同時に問題にしなければならないこととして、ニーコンの改革によってもたらされた新しい慣習等を認めず、それ以前の「儀式上の古い慣習」にあくまでも依拠しようとした「古儀式派」が公教会から分離した状態に置かれて多くの困難に直面し、また時間の経過とともに細分化し、主張・立場において多様な側面を見せていく過程で、その他のセクトに何等かの関わりを持つことがなかったか、両者の間に混乱がなかったかということがある。

本論では以上の問題点を考慮した上で「古儀式派という分離派」とその他の「正教会から分離したところで活動した宗教セクト」との関係について論じてみたい。

## 2) 概念規定

本題に入る前にまず「分(離)派」、「セクト」、「異端」等の用語について

---

(2) 古儀式派は自ら分離していったのか、分離させられたのかは非常に重要な論点である。

概念を規定しておかねばならない。キリスト教で一般に「分派」, 「セクト」という場合, 信仰上の理由で既成の教会から分離して存在する一定のグループのことをいう<sup>(3)</sup>。両者の区別はそれほど明確でない。信仰上の理由が要因になるといっても, 一般的にそれは教会が大きく分裂するような基本的・根本的な問題, つまり信仰告白上での問題ではなく, むしろ既存の信仰・教義に対する批判, 修正が主張になることが多いようである。教会政治の分野での対立, 典礼に関する対立などが実際上の問題となる傾向がある。根本的・信仰告白上の問題で教会が分裂するようなケースは, 例えば東西教会の分離, 或は宗教改革による新旧教会の分離などにみられるが, それは通常「シスマ」<sup>(4)</sup>といい, ここでの議論からは除外したい。次に, 分離派, 或いはセクトの存在形態には, 母教会と修正・批判の形であっても絶えず関係をもちつづけるという側面があるといわれる<sup>(5)</sup>。しかし, 分離派, セクトは母教会から分離しているという点では共通性を持ちながらも, 対立の内容によって種々雑多である。教理的に異端に通ずるものをもつ場合もある。基本的教理においては同一であっても細部において主張を異にするもの, 民族主義的傾向をもつもの, 教会内にとどまりながら分派を形成しているものなどがある<sup>(5)</sup>。さらに, 排他性も特徴として挙げられ, 勢力的には概ね小さな存在である。

「異端」(*αἵρεσις*) は, 語源的に (動詞 *αἵρέω* = 「選ぶ」から派生) 「選択

---

(3) 『キリスト教大事典』, 教文館, pp. 948-949. 但し, 本事典では「分離派」は「独立派」というイギリスの教会に係わる一つの組織として固有名詞扱いがなされている。

(4) 前掲書, p. 472.

(5) 前掲書によれば, 以下の八つの類別がある。(1)大教会に対する小さな交わり, (2)民族教会に対立し, 自由選択に基づく信仰共同体, (3)国教会に対立し, 国家的承認を得ていないか, 個人的関係によって成り立っている宗教集団, (4)救いの可能性が自己のうちにのみあると, 排他的に主張するもの, (5)社会学的に見て, 世俗化, 特権階級化した教会の主流派に対し宗教的信念に基づいて抗議する下層民の団体, (6)心理的に見て, 病的な思考の結果生じた熱狂的団体, (7)信条的にみて, 基本的信条, 特に使徒信条を受け入れない団体, (8)神学的にみて, キリストと聖書以外のものをも信仰の規範としてこれへの服従を要求するもの。

なお, B. ウィルソンの『セクト——その宗教社会学』(平凡社, 1972)は社会的存在のあり方を中心に詳しい分析を与えている。

された学派、宗派」で、分派的要素をもっている。新約聖書でもパリサイ派などのユダヤ教の宗派（使徒行伝 15:5）を指す場合、「ナザレ人という一派」（使徒行伝 24:5）や「この宗派」（使徒行伝 28:22）という表現で実質的にキリスト教を指すなど「宗派」という意味で使っている場合、教会内部の意見の対立からくる「分派」（1 コリント 11:19）を指す場合がある一方、初代の信仰を歪めるような教えを指して警戒を勧める分脈で使う場合がある。最後のジャンルでは、偽教師の「滅びをもたらす異端」（2 ペテロ 2:1）、ユダヤ教的グノーシス主義（コロサイ 2:8）、ドケティズム（1 ヨハネ 4:2-3）などがその例である。ここから「異端」は初代キリスト教の基本的な教えを否定したり、追加するような主張・教えを指すようになっていく。キリスト教が定着した中世では当時のキリスト教信仰の判定者であったカトリック教会を正統としてそれと異なる主張、教えを展開することが一般に異端とされた。こうして、「異端」という概念は異なる主張・立場の内容をめぐる概念となり、分離派、セクトという存在形態の概念とは基本的に異なる。ただ、既存のものと見解を異にして活動している分（離）派、セクトとは、その見解の相違がどこにあるかによって異端の概念との関わりが出てくる。しかし、何をもって異端とするかについては「正統」とされているものの主観的要素が大きな意味を持ちがちで、分離して存在しているものは内容にかかわらず即異端とされる傾向はしばしばある。

筆者は異端性の判別については、ここで扱う問題がキリスト教にかかわることであるので、基本的に非聖書的な主張（聖書には初代のキリスト教の教え、存在の仕方なども語られており、それらも含める）があるかないかによって行う。次に、カトリック——正教、カトリック——プロテスタントの間には当初は相互に異端視する関係があったが<sup>(6)</sup>、今回のテーマは

---

(6) 東西教会の最終的な分裂は次のような経緯で 1054 年に起こった。前年、聖餐用のパンについてコンスタンティノーブル総主教ミカエル・ケルラリオスが西方の方式（種なしのパンを用いる）を非難していたが、1054 年になってノルマン人の南イタリア侵攻を契機にローマ教皇レオ 9 世は軍事同盟を結ぶべく特使フンベルトゥスをコンスタンティノーブルに派遣した。しかし、東西教会の慣行、＜フィリオクエ＞問題をめぐって論争となり、フンベルトゥスはケルラリオスを破門にした。ケルラリオスもフンベルトゥスを破門にし、決定的分裂に

ロシアにおけるギリシア正教会についての問題であり、キリスト教三派の関係は除外しあくまでもギリシア正教内部のこととして扱いたい。つまり、ここではギリシア正教(厳密にはロシア正教)の教えが他の教派との関係で正統か異端かということではなく、ギリシア正教内部での問題としたいということである。勿論この場合にも聖書の基本的主張が根本的な尺度となる。但し、プロテスタントのように信仰の規範を聖書のみとしないで、聖書(しかも、いわゆる外典と呼ばれるところのものにも依拠している<sup>(7)</sup>)と聖伝とするのが正教会の立場であり<sup>(8)</sup>、聖書だけで正統——異端の

---

至ったというのが一般的に認められている経緯である。この相互破門状態はローマ教皇パウルス6世とコンスタンティノーブル総主教アテナゴラス1世との会見を経て、1965年によりやく解除された。宗教改革の際には、ローマ・カトリック教会はプロテスタント諸教会を異端視した。改革者ルターについては、告書『放逐状』によりローマ教皇レオ10世は破門にしたが、ルターはそれを会衆の前で破り捨てた。最終的なルターの破門は1521年1月3日付けの大勅書『デチェット・ロマヌム・ポンティフィテム』による。プロテスタント側はカトリック教会の教え、慣習等に対し、根本的なところで神学的異論を唱えたわけで、異端的であるとの立場を持っていた。

- (7) 正教会では「不入典書」と言われる。「ソロモンの知恵書」、「シラフの子イイススの書(ベン・シラの知恵)」、「トビト書」、「ユデト書」、「エレミア哀歌(エレミアの手紙)」、「エズラ記(エスドラス書)(Ⅱ, Ⅲ)」、「マカウエイ書(マカベア書)(Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ)」、「バルク書」である(カッコ内は別称。キリスト教各派で表記は異なる)。カトリックと内容的に若干の違いがあるが、これらは聖書に納められている。新約聖書についても一般に外典は存在する(「ヤコブの原福音書」、「ペテロ福音書」、「トマス福音書」、「ペテロ行伝」、「パウロ行伝」、「アンデレ行伝」、「パウロ黙示録」等がある)が、正教会聖書には納められていない。これらとは別に、古代ユダヤや異教的伝説なども入り交じってできた各種の物語があった。ビザンツからブルガリアを經由して11世紀頃ロシアに流入し、普及していった「アダムとエヴァの生涯」、「イザヤの幻視」、「キリストと悪魔の論争」、「聖母の地獄巡り」などである。これらについては、ボゴーミール派とともに入ってきたという説もある(ディミータル・アンゲロフ『異端の宗派 ボゴーミール』恒文社、1989)。

- (8) 主教ワシーリィ著『正教要理』(日本ハリストス正教会宗務局、1952)によれば、「教会は、その包蔵する神の啓示を弘布するに二つの方法を用いる。即ち聖伝と聖書である。聖伝とは真に主神を信仰し敬う人々がその模範または言語によって他の人々に教理、神の律法、諸機密、聖典を伝えることをいう」、「聖伝

判断を下すことはできない。しかもこの「伝統」という概念が複雑な要素をもっているので十分に注意を払わなければならない。ともあれ、「異端」は正教会の基本的な枠組みの中で扱っていききたい。

中世ヨーロッパのキリスト教会を大きく動揺させた「カタリ派」と総称されるものについては既に多くの研究がなされているが、中世ロシアの宗教セクトに対する影響や関わりについては未だ十分ではない<sup>(9)</sup>。この問題はそれ自体大きな問題であるのでここで軽々に扱うことは控えたいが、ロシアの宗教セクト或は古儀式派という分離派の関係を扱う場合には重要な問題の一つである。ロシアの教会が分裂する前に興った宗教セクトと以後に生まれたセクトについては後に触れるが、古儀式派を正しく位置づけるためにはこれらのセクトの主張を検討するとともに、特に前者についてはカタリ派の影響がないかということも考慮されなければならない。その意味で中世ヨーロッパの異端運動について基本的特徴を簡単に挙げておきたい。ゴードン・レフは『異端の精神史』において中世の異端は、神学的概

---

は聖書より古いのである。しかし神の啓示をもっとも正確に不変に保存するため、聖書は断じて必要である。……とはいえ、我らは聖書を有っていても、これと一致する聖伝を守らねばならない」、「聖伝は聖書を正しく解釈するためにも、諸機密を正しく行うためにも、聖典を正しく守るためにも必要である」となっており、聖書の「テサロニケ人への第二の手紙2:15」に依拠して、神の啓示を知り、信仰を守っていく柱として聖書とともに聖伝を挙げるのである。聖書は「書かれた聖伝、聖伝は生きた聖書」(ホミャコフ)と受け止められている。

参照、拙論「正教に於ける〈聖伝〉について」(中京大学教養論叢第19巻第3号)

- (9) カタリ派形成に大きな影響を与えたブルガリア起源のbogomil派がロシアに浸透していたかどうかについての問題は、「まだ、極めて不十分にしか知られていない」(オボレンスキー)。しかし、慎重なオボレンスキーも11世紀から15世紀の間に入り込んでいた可能性を認めている。『原初年代記』の1071年の項に登場する〈二人の魔術師〉が展開する人間創造論にはbogomil的要素があるとしている(前掲ディミータル・アンゲロフも同じ見解を示している)。また、13世紀初期に編纂され始めた『キーエフ聖者伝』のなかのニキータについての部分にもbogomil派が旧約聖書を拒絶するのにならった主張があったことを指摘している(Dmitri Obolensky "The Bogomils, A study in Balkan Neo-Manichaeism", Cambridge UP, 1972, pp. 277-8)。

念にかかわる3—5世紀の異端に対し、改革や霊的再生を求めるものであったところに特徴があるとしている。従って、制度としての教会に対する挑戦という傾向をも持ち、教会にとっては危険分子となった。そして彼らのテーマは清貧、新しい秩序への予言的信念、使徒的な教会の希求、魂における神秘的な神探求であるという<sup>(10)</sup>。清貧の追求とは禁欲的な生活の追求や聖職売買の批判であったが、その関連においてキリストを人間としてだけみる（キリスト教ではキリストの神性と人性が主張されているが、清貧のプロトタイプとしてのキリストの人性を強調するものであった）新しい見方、キリストを人間の規範として見習おうとすることにつながる可能性があった。聖書についても、真理の源泉というよりもキリストの生活と教えの源泉として啓示された真理、地上に起きた出来事の歴史的証言と見なして教会を裁く規範とした。さらにゴードン・レフは異端の進化の過程を次のように示している<sup>(11)</sup>。容認されている信条から出発——教会との間に敵対関係が生まれる——それが強まる——理想がより極端になり、しかも品位を落とした形態を帯びる——教会側の排除で頂点に達する——自分達こそが真の信者で、迫害する教会は異端とするというものである。この過程では学識のあるものから一般の人々の運動に広がっていくが、それが急進化、歪曲につながらせる要素ともなるのである。異端については以上のことをまず念頭に入れておきたい。

### 3) ロシア分離派の扱われ方

ロシア・ソビエト及び欧米のラスコール研究には既に膨大なものがあり、テーマも多岐にわたっているが、ロシアの代表的研究家の一人スミルノフは多くの研究のなかで古儀式派とその他のセクトとの関係の問題をも扱っている<sup>(12)</sup>。また、ソビエト時代になっても活躍した哲学者ボンチ＝ブルエヴィチはこの問題について著作を残している<sup>(13)</sup>。両者の研究で

---

(10) ゴードン・レフ『異端の精神史』、平凡社、1986、pp. 82-84

(11) 前掲書、p. 83

(12) П. С. Смирнов 〈Внутренние вопросы в расколе в XVII веке〉, СПб, 1898など

(13) В. Д. Бонч-Бруевич 〈Раскол и сектантство в России〉 1903 (доклад II очередному съезду РСДРП)

は古儀式派とその他の宗教セクトとは明確に区別されている。彼らは一般に言う「(教会)分離」(ラスコール),「分離派」(ラスコーリニキ)は17世紀半ばのニーコンの改革をめぐって生じた分離,それにより生み出された分離派に限定している。即ち,古儀式主義,古儀式派にのみ「ラスコール」,「ラスコーリニキ」の概念を適用している。辞書編纂者のダーリもラスコーリニキとその他の宗教セクトとの間に一線を画している<sup>(14)</sup>。これらは「分離派」を狭義に捉えているものだと言えよう。「ラスコール」の原義からすれば,「分裂」が重要な要素となっており,その意味では一定の妥当性がある。

一方広く捉えることもできる。ドストエフスキ研究者の江川卓氏はその著書『ドストエフスキ』(岩波新書,1984)で「広い意味で〈分離派〉と総称される様々な宗教的セクト」との表現を用い,古儀式派だけでなく後述するフルィスティなどもその範疇にいられておられる<sup>(15)</sup>。この立場は支配的な教会から分離して存在している信徒達の集団を総称する立場であるが,グループとしての存在のし方に焦点が合わされたものである。

しかし一部には,その他の宗教セクトが古儀式派から生まれてきたかのように言及される場合がある<sup>(16)</sup>が,果してそのように断定してよいものかどうか,厳密に検討した上でなされるべきであるように思われる。

以上のように,古儀式派という分離派の位置づけは微妙である。コンテ

(14) В. Даль 〈Словарь русского языка в четырёх томах〉によれば,ラスコール「(3)17世紀中葉に公教会に対抗して起こり,一連のセクト形成を結果した宗教・社会運動,(4)古儀式派」となっている。(3)は17世紀の末に生まれたフルィスティをも含む余地を残した表現であるが,「17世紀中葉に起こった」ものとされていることからニーコンの改革を巡って起こった教会の分裂を表現しているものと受けとめるのが妥当であろう。

(15) 江川卓『ドストエフスキ』岩波書店,1984, pp. 121-137

(16) ドゥホボール教徒についての言及のなかで,「兵役を拒否して弾圧にあった旧信徒(他の箇所では分離派=古儀式派と同一視しておられる=安村)の一派ドゥホボール教徒の……」といった説明がなされるケース(川端香男里『ロシア文学史』岩波全書, p. 267),より広げて「この分離派(前後の文脈からは古儀式派を指している=安村)から,モロカン,フルィスト,ドホボールといった異端小分派が生まれます」(中村健之介『ドストエフスキーのおもしろさ—ことば・作品・生涯』岩波ジュニア新書, p. 125)などである。



キストを大切に位置づけていかなばならない。近年わが国でもようやくラスコーリニキについてロシア理解を深めるため一定の注意が払われるようになってきた。しかし、まだ十分ではない。本論では古儀式派とその他の宗教セクトの関係をめぐる問題に整理を与え、且つ筆者の見解を提示したい。

### (I) 17 世紀以降のロシア宗教セクト

まず、いわゆるラスコーリニキが生まれた 17 世紀以降に興った主な宗教セクトの特徴を概観しておきたい。全てを網羅することはできないが、そのことで後述する古儀式派の立場、特質がより明確になろう。

#### Хлысты (Хлыстовщина, Христовщина)

17 世紀の末に興ったとされている<sup>(17)</sup>。当時の宗教的時代背景の一つには、ニーコンの教会改革をめぐって教会が分裂し、それに伴って終末論がさかんになったことがある。つまり、キリストの再臨、裁きの日の到来が待ち望まれるという空気があった。それはいくつかの極端な動きにつながっていった<sup>(18)</sup>。厳格な禁欲的生活を追求し終末を待つ動き、古儀式派の無僧派の一部に見られるような殉教の教えを信条とする動きのほかに、新しい教えに走る傾向があった。その第三の動きは従来の正教の教えを逸脱したよりエキセントリックなものであった。その傾向は当時の農民を中心とした庶民の神を求める心情として一つの典型的な現象だったようである。

---

(17) メーリニコフはこの派の痕跡を、既に 10 世紀のウラジーミル大公の時代に入ってきたブルガリアの異端ボゴミール派の影響のうちに見て、17 世紀における出現は 700 年を経て再出現したかのように見ている。17 世紀以前のキリスト出現の例には、1507 年にガリーツィヤに 12 人の使徒を伴ったキリストが出現したという年代記の記述があるとしている。信徒たちの言伝えの中にある例としては、ドミートリイ・ドンスコーイの時代のアヴェリヤーン、イヴァン 4 世の時代に出現したイヴァン・エメリヤーノフがある。

(18) 古儀式派・無僧派内部の諸派の主張については拙論「ラスコーリニキの内部分化(1)」(中京大学教養論叢 第 20 巻第 2 号, 1979 年)を、古儀式派にみられる終末論・反キリスト論については、拙論「ラスコーリニキの反キリスト論」(1), (2) (中京大学教養論叢, 第 25 巻, 第 1, 3 号, 1984)を参照されたい。

こうした宗教的時代背景の中で生まれ、秘かに広まったのが一般に「鞭身派」と呼ばれる宗教セクトである。ダニーラ・フィリッポフ（ダニール・フィリッポヴィチ、ダニイロ・フィリッポフとの説もある）というコストロマーの農民出身の者（極端な禁欲主義者カピトーン派<sup>(19)</sup>に属していたともいわれる）が、ニーコンの改革をめぐる重大な論点の一つであった〈ニーコン以前の古い書か、改革後の新しい書か〉という問題について「どちらも必要無し」、「必要なのは（独自の）黄金の書、命の書、鳩の書である」という極めてラディカルな主張を展開し、古い書も新しい書も大きなかますに入れ、重い石を加えてヴォルガ川に投棄した（セクト内部の言い伝えによる）。これは古儀式派とも立場を異にするもので、その意味では正教を逸脱する要素をもっていた。ある時彼は山に登り、天使、大天使、セラフィムその他の天的存在に囲まれた。その中で万軍の主<sup>(20)</sup>が降臨してダニーラのうちに宿り、これによって彼は「生ける神」となったというのである。そして「キリスト」<sup>(21)</sup>となり、十二戒<sup>(22)</sup>を定めて、独自の教説を

---

(19) カピトーンについては謎の部分が多く詳しくは分っていないが、古儀式派無僧派にも（無僧派の作家セミョーン・デニソフ・ヴィチ・ムッシュツキなどはカピトーンを自派と見なしている）、フルィスティにも影響を与えたようである。例えば、ニーコンの改革を巡っての旧・新典礼書については、古儀式派の立場である〈古い、ニーコン以前の書〉のみを尊重したが、その一方ではすべて書かれたものは単に〈外的な教え〉に過ぎず、真の救いには十分ではなく、〈生きた書〉つまり人間の心にある書こそが必要であるとの主旨のことを主張することでフルィスティに通ずる考え方を持っていたのである。拙稿「17世紀ロシアの終末論」（日本ロシア文学会中部支部会報18号）をも参照されたい。

(20) 火の雲の中を火の戦車に乗って万軍の主 Савваоф が降ったと言伝えられている。「万軍の主」とは、旧約聖書「列王記第一」17:45、「詩編」23:10などにみられる神の名で、神の全能性を表すものである。ダニーラは лжеcавваоф と呼ばれることがある。

(21) イエス・キリストは「古いキリスト」とみなされ、神の顕現を受けた者よりも低いものとされた。ここでいう「キリスト」は神の顕現を受けた者で、群れの指導者となる者である。この他に、「聖母（儀式の進行に伴う宗教的喜悦の中で狂信的状态＝ラヂェーニエに陥り、そのときに身籠った女性になる場合、その他がある）」、「天使」、「使徒」、「予言者」がいた。

広めていった。コストロマー近郊に拠点を構え、そこへ信者達が通ってきた。彼の住む家は「神の家」、「天のエルサレム」などと呼ばれた。1700年に生きながら天に召されたという伝説も残っている。ダニーラは後継者として、イヴァン・チモフェーエヴィチ・スースロフを選び、彼に(30才の時とされるが、キリストが世に出たときの年齢に一致する)神性を移した。彼は12人の「使徒」と1人の「聖母」を従えて教えを広めていった。古儀式派や宗教セクトに詳しく作家メーリニコフによれば、彼にはいくつかの伝説的エピソードが残っている。まず、彼はこの派の「聖母」アリーナ・ニェスチェローヴァから彼女が100才の時に生まれたとされ、その誕生は単なる人間としてではなく、神の子、キリスト自身としてのものであったと神聖視される<sup>(23)</sup>。アレクセイ・ミハイロヴィチ帝は彼を逮捕し、拷問にかけたのちクレムリンの壁にはりつけにしたが、甦って、再び布教

---

② 第一戒「我は予言者たちにより語られてきた神にして、人間の魂を救うため地上に降った。わがほかに他の神はない」

第二戒「ほかの教えはない。捜してはならない」

第三戒「おのれの分をわきまえよ」

第四戒「神の戒めを守り、世を漁る者となれ」

第五戒「酒の類は飲んではならない」

第六戒「聚ってはならない。妻を得たる者、妻とは姉妹のごとく暮らせ。未だ聚らざる者、聚ってはならない。妻を得たりし者、別れるべし」

第七戒「口汚いことば、忌まわしいことば(悪魔、悪霊などの語=安村)を口にするな」

第八戒「婚礼、洗礼の祝宴に行ってはならない、酒宴に出てはならない」

第九戒「盗んではならない。1コペイカでも盗むものは、あの世で頭に1コペイカを置かれる。地獄の火で溶かされるとき、ようやくその者赦しを得ん」

第十戒「この戒めは秘密にせよ。父にも母にも明かしてはならない。鞭で打たれても、火で焼かれても、耐えよ。耐える者は忠実な者で、天の御国を受け、地上では魂の喜悦を受くる」

第十一戒「互いに往き来し、もてなし合い、愛を施せ。わが戒めを守り、神に祈れ」

第十二戒「聖霊を信ぜよ」

②③ これは旧約聖書中のイサクの誕生を想起させる。イサクは父アブラハムが100才、母サラが90才の時に生まれた(「創世記」21:5, 17:7)。

したというのである<sup>(24)</sup>。そこで再度逮捕され、殺され、皮膚を剥がれたが、信者たちが幕で遺体を包むと、それが新しい皮膚となって、またもや布教を始めたという。三度目に逮捕されたのは、皇妃ナターリア・キリーロヴナがピョートルを産むときであった。そのときナターリアに、「無事分娩できるのは、イヴァン・チモフェーエヴィチが解放されるときだけ」との予言があり、ツァーリは彼を解放したといわれる。そして1718年100才で昇天したという<sup>(25)</sup>。イヴァンの死後彼の地位を継いだのは、ニジェゴロドの銃兵隊員プロコーピ・ダニーロヴィチ・ループキンである。彼は1732年にこの派の宗教的喜びの最中に死んだとされている。

こうしてダニーラが始めたこのセクトは、儀式の際に手や鞭（хлыст）で互いに叩きあい、歌い踊りながら集団的恍惚の状態に入ることを一つの特徴としていた。そのため、хлысты と呼ばれるようになったのである（但し、自分達の間ではそうは呼ばず、また外部の者からそう呼ばれるのも嫌ったという<sup>(26)</sup>）。ダニーラ以後指導者は自らを「キリスト」と称したため

---

(24) メーリニコフによると次の通りである。イヴァンのことはアレクセイ帝の耳にまで達し、イヴァンは40人の弟子とともに逮捕され、モスクワで厳しい取調べを受けた。拷問にもかかわらず誰一人としてしゃべらなかった。その後総主教ニーコンが取調べにあたったが、成果はなかった。次いで、貴族モローゾフのもと送られた。モローゾフはかえってイヴァンの聖性を理解するところとなり、病気を口実にそれ以上はタッチしなくなった。最後にオドエフスキー公がクレムリンで拷問にかけて尋問した。遂には火にかけたが、火が届かず、無傷のままであった。そこでクレムリンの壁で十字架にかけられた。息を引き取った彼を番兵は十字架から下ろし（木曜日）、翌日墓に埋葬した。土曜日から日曜日にかけて多くの人の前で甦った。参照、П. И. Мельников, 〈Собрание сочинений в восьми томах〉, «Правда», М., 1976, т. 8, стр. 65—121

(25) 1699年、イヴァンのもとに〈万軍の主〉ダニーラ（100才のとき）が現れ、テーブルをはさんで会見したという言伝えがある（そのテーブルは聖遺物として派内に1845年まで保管してあったという）。

(26) メーリニコフによれば、必ずしも全ての者が鞭で打っていたのではなく、「鞭身派」と呼ばれるのを嫌ったようである。ちなみに「フリストーフシナ（鞭身派）」という呼び名は18世紀初めのロストフのドミートリイ（1651—1709）、トヴェリの大主教フェオフィラクト・ロパーチンスキの著作で用いられた「フリストーフシナ（キリスト派）」の変形である。前者は、著者がロストフの府

христовщина ともいわれる。この他にも次のような名前と呼ばれることがあった。богомилы (ボゴミール派), кантовщики (酒を飲んで大騒ぎする者たちの意?), сладкоедцы (甘いものを食べるものたち), шалопуты (怠け者, のらくら), монтаны (モンタナ派), духовные христиане (霊的キリスト教徒), самообожатели (自己崇拜者), ханжи (偽善者), купидоны (キューピッド派), братья-корабельщики (船乗り兄弟), вертуны (落ち着かない者たち), баклушники (無為に過ごす者たち) などである。女帝エリザヴェータの時代(在位1741—61)には、「クウェーカー」の異端と呼ばれていたこともある。

では、どのような教えを具体的に展開していたのだろうか。まず当時の正教会の教えに反発し、救いに必要なものは霊のみとした。それに伴いイエス・キリストの意味が弱められる。聖書中にみられるキリスト(イエス・キリスト)は「古いキリスト」であって、神の顕現を受けたこの派の「キリスト」よりも低いものとみなされた。つまり、イエス・キリストは三位一体の一格としての神の子、唯一の世の贖い主とはされない。神性が宿っていると彼らが言うところのキリストの一人なのである。十字架の死、甦りも寓意的に受けとめられた。イコンや十字架は一部の儀式では用いたものの、それらを礼拝することは禁じていた。教会で行われる聖体礼儀やその他の勤行は否定した(同じものを何世紀も全く変わりなく読み、歌うことは死んだものであるとして否定したのである)。祈りに関しては、「主の祈り」のみとし、霊歌、詩編を歌った。ただ表面的には、総じて正教徒よりも熱心だったようである。

---

主教に任命された1702年と召天した1709年の間に書いたであろうとされている《Розыск о раскольнической брынской вере》(初版は1745年。三部から成っている。第一部は、ラスコーリニキの信仰は偽りであることを証明しようとするもの。第二部は、彼らの教えは霊的に害悪であることを示すもの。第三部は、彼らの行うことは神意にかなっていないとするもの。神秘主義的セクト、合理主義的セクトに対して書かれた部分もある)でのことであり、後者は《Обличение неправды раскольнической》においてである。メーリニコフは、聖職者がこのセクトを呼ぶ際にキリスト(「フリストース」)の名が含まれることを嫌ったことも鞭身派(「フルィストーフシナ」)と命名した背景にあると見ている。

しかし、具体的には後述する奇抜で、異端的な「罪の教理」が彼らにはあった。罪を追い出すために罪を用いるということである。徹底して罪を犯すことで罪の償いをするというもので、真の救いを得るには罪の償いのために罪を犯すことを必要とするという教えである。

この罪の教理と関連してのことだと思われるが、結婚は否定された。一夫一婦制は利己的で、邪悪な独占と考えられた。婚姻関係は不浄な忌むべきものとされた。夫婦となっているものについても肉体関係は禁じられた。「婦人の共有」といった概念すらあったようである。この派の第六戒に「聚ってはならない。妻を得たる者、妻とは姉妹のごとく暮らせ。未だ聚らざる者、聚ってはならない。妻を得たりし者、別れるべし」とあるのである。ここから信徒同士の性の交わりが美化されるようになっていく。「鳩と鳩とがむつぶがごとき愛」である。

二元論的な考え方も見られた。天と地、物質界と霊界という対立を設定する。道徳的な教えとして、霊は善の源、肉は悪の源ということが強調される。最初の人間アダムは肉を喜ばすことで罪に陥り、妻帯の罪に堕ちたという。ここに墮罪のゆえに不浄なものとなった肉に閉じ込められた清い霊の闘いという概念が登場し、これに勝利するために厳しい禁欲的生活、自分の意志を放棄すること、忘我状態に入るため飛び跳ね、踊り、回転し、両手を広げてまわり、息もたえだえになることが求められた。七つの天があるとされ、そのうち七番目の天には、聖三位一体、聖母、主天使、天使、聖者が住んでいる。神は人間のうちに何度も顕現（受肉）するとも考える。人間の道徳的品性と必要性に応じて神の受肉は絶えず行われ、キリストが次々に現れることになる。同時に数名のキリストがいるということもおこってくる。その場合にはどちらが上位であるかといった論争が生じることもあった。聖母もまた何人かいた。

聖書も変わりなき神の啓示とは受けとめない。イエス・キリストが伝えた神の啓示はイエスの生きていた時代だけのもので、原罪には新しいキリスト、予言者の教えが意味を持ってくるのである。但し、聖書そのものを否定するわけではない。新約の時代にあるとしてこのセクトでも聖書の原型的な意味は保たれているのである。

人間の靈魂のあり方についても独得の考え方をもっていた。魂の先在

性、他のものへ移ることを信じていた。この派のメンバーの魂は死後、天使となるのに対し、この派の戒律を守らなかったものの場合は動物、子供、不浄な存在に移る。結婚をしている者の魂は豚に移るとされる。魂は段階を経て浄められる。

日常生活では、酒類、タバコを慎む。音楽、カルタ等の娯楽も禁じられ、宣誓も否定される。セクトの組織は「船(箱船)」と呼ばれ、そこではキリストなる指導者が無限の権限をもっていた。女性が指導者となることもあり、その場合には聖母と呼ばれていた。彼らは儀式を司った<sup>(27)</sup>。キリストに最も近い予言者(通常12人=イエス・キリストの弟子の数に合わせてあることは明白である)は「使徒」と呼ばれていた。

以上からも正教或はキリスト教全般とは相容れない教えをもっていたことが明白である。イエス・キリストは救世主として十分でない、これに代わるキリストがいるというキリスト論は異端によくみられる考え方であるが、ここにも明らかにそれがみられ、異端的である。結婚の否定についてもしばしばみられることであるが(古儀式派の一部のグループにもある)、使徒パウロは初代教会の信徒たちに書簡を送って結婚に関して指針を示しているものの(1コリント7他)、その主旨からしてもこの派の主張は逸脱している。そして実際には不品行に陥っている。いわゆる姦淫を避けるために、姦淫ではないような状態・神学を作り出して結果的には性的不品行を行うことになっている。そのためにそうした「罪」の概念を取り除くべく、徹底して罪を犯すことで罪を償い、浄化されるという異常な主張を展開しているのである(こうした考え方はこの派のラディカルなグループ<新しきイスラエル>では特に重要視された)。「罪」の概念はまず性的なことと結び付けられるのであるが、そういう意味での罪はキリスト教の言うところの「罪」の具体的な結果であって、神から離れているということにおけるいわゆる原罪の問題とそれからの救いが第一にされない限り解決はないというキリスト教の立場とは異なっている。罪からの救いとの関連でイエス・キリストが絶対的位置を占めないことにそれは顕著に表わされ

---

(27) このセクトの群れは、「細胞」のほかに「箱船」と呼ばれていた。群れを船に見立てると、指導者として pilot が必要であり、「キリスト」はパイロットとも言われていたようである。

ている。

この派の少なくとも一部では、日曜日ではなくて金曜日が聖なる日とされていた（ボゴミール派も金曜日を聖日としていたようである）。特にパスハのあとの10週間の金曜日、就中九番目の金曜日が尊ばれた。金曜日は殉教者パラスケーヴァ（金曜日の意味をもつ *παρασκευή* に由来する）と結びつけられ、プラスコーヴィアの金曜日と呼ばれた。そして次のように祈られた。

Благослови, Пятница,  
Сударыня-матушка,  
Свет-богородица,  
Святым делом порадеть,  
Трудов своих не жалеть, и. пр.

先に挙げた忘我状態に達するためのこの派の独得の儀式の一端を具体的に示しておく。儀式は大体特別に掘られた秘密の地下室で行われる。こうした集会場は Сионская горница とか Иерусалим とか呼ばれる。信者は特別な広い袖の白い上着を着、色のついた帯を締める。そして円状に座る。独自の聖歌を歌い、何人かが踊りを始める。残りの者は座ったまま、歌に併せて膝を打つ。歌の調子が徐々に早くなり、踊りの動きも早くなる。それにともなって興奮も高まっていく。使徒と呼ばれるものが何人か円のまん中で、消耗して倒れるまで回る。その際辻褃の合わない言葉を発するが、それが「予言」と呼ばれる。信者同士互いに叩き合う。踊るものはますます早く回り、汗みどろになる。全員が「おー、霊よ」と叫び、けいれんを伴った動きをする。ここから狂信的興奮状態 *радение* に移っていく。禁欲は一挙に反対の極へ移る。無差別な性的遊興に変わるが、それは「キリストの愛」と受けとめられる。この際に身ごもった女性は「聖母マリア」と呼ばれるのである。

さらに、Alex de Jonge によれば一部には肉体のある部分を切取り、食するというカニバリズムの奇習もあったようである<sup>(28)</sup>。

(28) Alex de Jonge, "The Life and Times of Grigorii Rasputin", London, 1982, p. 56



帝制末期の皇室、政府に隠然たる力を振るった僧グリゴーリィ・ラスプーチンはこのセクトのメンバーだったという説がある。その友人のアレクセイ・シュチェーチーニンは先に挙げた過激派〈新しきイスラエル〉の指導者であった。多くのラスプーチンの伝記や研究書には彼のこの派との結び付きが示されている<sup>(29)</sup>。

---

(29) 近年邦訳されたマッシモ・グリッランディの『怪僧ラスプーチン』(1986, 中央公論社)にもラスプーチンのこの派への接近、儀式の様子などが示されている。しかし, Joseph T. Fuhrmann, "Rasputin—A Life" (NY., 1990) では, ラสปーチンがフルィスティのメンバーであったという説に関し, 一定の影響を受けてはいたことは認めるものの, 否定している。彼の教えは教會的觀點に立てば, 異端的に見えても, 彼は特定の異端セクトに入ってはいなかったと断定している (p. 44)。